2 「影纏いし白刃」

氷鴉　刹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
２「影纏いし白刃」

【Ｎコード】
Ｎ５５９５Ｎ

【作者名】
氷鴉　刹

【あらすじ】
王家の弱体化と共に、人々の「古の王」への信仰は密かに、そして着実に広がりつつあった。信仰の中心は巧みに隠れ、避け、着々と王家を狙う……。陰謀と平穏が並立するブリステアの、長く続く因果とその果て。王家か？　それとも古き王か？　世界は着々と“信仰”に呑まれようとしていた。
【補足】２とありますが１がなくとも独立して読めます。長編ＦＴ「半翼の継承ーＳｕｃｃｅｓｓｉｏｎ　ｏｆ　ｒｅｓｔｒａｉｎｔ－」の２「影纏いし白刃」

ブリーネラ地方の国家一覧

『ブリステア』（幻帝国）
首都：ブリステア
民：ルシフェル系（時空）
アクフレージョンに度々侵攻されてはいるが、国家の存続が脅かされるほど弱小国でもない。
魔力が最も弱い。主に剣技、武術に秀でている。

『アクフレージョン』（闇帝国）
首都：ブラクイン
民：エブリース系
ブリステアに幾度となく侵攻している。
暴君レイド帝が治める、軍事国家。

『クネメレイ』
首都：クロウナート
民：ルシフェル系（召喚）
あまり外界と接することはない。
国内では僕（しもべ）を得るための血肉の争いが古より続く。

『サフルーズ』（土帝国）
首都：リアンニ
民：エブリース系
砂漠の中心のオアシスにある国。
国土の南西には未開の地と言う密林がある。
空位が１２年間続いた。

『ラシアナ』

首都：イプセン
民：伝承を継承する巫女、導師。
支配者と神が住まう。

『フローナ』
開拓者のための国。
街一つ一つが自治されている。

『フローガル』（水帝国）
首都：リミア
民：エブリース系
同盟国ウィーナイラと共にファートラルとアクフレージョンに攻められ従属国に。

『ウィーナイラ』（風帝国）
首都：フイリン
民：エブリース系
フローガルと同じ運命をたどる。

『ファートラル』（火帝国）
首都：トラルシア
民：エブリース系
南の小国に過ぎなかったが、ここ２０年の侵略により国土を拡大した。
過激な侵略国家。

『ドフナーラ』（龍帝国）
首都：ナリミア
民：エブリース系
全国民が龍へと姿を変貌できる。

向かうところ敵なし。
しかし、国民は皆温厚で戦いを好まないため、最も平和な国。

『ナーガナイル』（魔帝国）
首都：エレミネア
民：エブリース系
ブリステアとは少しばかり親交がある。
ファートラルの攻撃を度々受け、国内は混乱している。

一章の登場人物

【登場人物】（五十音順）

・アーネイ・ノイルス
ブリステア皇帝。隠された歴史の全てを知るのは彼一人。
テイラー、テンレイに至極嫌われている。
前者は過去の因縁、後者はただ性格が気に入らないだけ。

・アリューセン・ザルク
アーネイの５歳上の兄で、継承式を前にして姿を消した。
この失踪によって、ザルク家は皇位継承権を失い、
トワルへ飛ばされることになった。

・アルヴァ・ソーン
トワルの近衛騎士長、兼テンレイの世話係。
どうしても言うことを聞かないテンレイに頭を抱えている。
テイラーに絶対忠誠を誓う。
性格は冷酷、基本的に無駄なことはしゃべらない。

・サラ・アイヴィス
クトックナーの騎士レドール・アイヴィスの妻。
酒場ｈｏｐｅ　ｒａｉｎの女主人で、旦那との馴れ初め話は有名。

・テイラー・ザルク
トワル公爵。テンレイの父で仕事でほとんど城を留守にしている。
街の人から“いい人であるが、昔は……。”と噂されている。
その真相を知るのはレイルザとアーネイだけである。

・テンレイ・ザルク

トワルの公子。従弟のロウと共に酒場に入り浸っている。
頭が固くて、高い位が大嫌い。
歳は１４。主人公。
趣味は剣の鍛錬。
砂糖抜きのミルクティーをよく飲んでいる。

・フミリィ・ネドル
クトックナー公爵夫人。ロウの母。
浮気を繰り返す夫に愛想を尽かさない忍耐強い人。
と同時に、レイルザに次ぐ恐妻。

・ルージ・ネドル
クトックナー公爵。ロウの父。
兄のテイラーに愚か者扱いされている。
重度の浮気症＋どこかおかしい。

・レイルザ・ザルク
トワル公爵夫人。テンレイの母。
ブリステア一の恐妻である。
しかし、怒らせなければ素晴らしき妻。

・ロウ・ネドル
クトックナーの公子。テンレイの従弟。
隠しては在るが、気の良いお姉さんが好き。
性格は快活。歳は１２歳。
キウイジュースが好物。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（前書き）

――初書は２００７年。
一作目の「紅月の導と牢獄の門」（元名：ＵｎｄｅｒＭｅｍｏｒｙ）が完結した後，何故かテンレイの話が書きたくなり書いてしまった作品。過去編（本当の世界の話）となっております。
一作目を読んでないぞ！　と言う方もご安心を。これは独立して読めるものなのでいくつかの布石を無視することになりますが，読むにあたっては支障がありません。

Prologue

古びた本。表は血のように紅く、裏は毒のように黒い。

紅き面より読めば沈黙を守り、黒き面より読めば多くを語る。

共にいることも許されず、互いを拒絶しあう対なる魂。
対なる力は対なる力を無にする。
もし、両名の血を引く者がいればその者は生受けしときより呪いを受けよう。
――相殺する両名の血は確実なる不幸を約束する。

常に影は笑っている。
「決してその姿を現さず――幼子の眠りが続くまで世界の均衡を約束しよう」と。

――支配者による運命の書　黒――

1：「霧雨に閉ざされしトワル」

鈍色の天の許，雨は一向に止む気配がない。
雷鳴と共に降り注ぐような雨でないため，街を見遣れば小走りに道を行き交う人々の姿が目に入る。
しかし，人々は語らうわけでもなく街はただひたすらに静かであった。
――幻国ブリステア，トワル公領。
王となるべき者がその地位を剥奪され，暮すことを余儀なくされた決して空の晴れぬ地。
何故剥奪されるに至ったか知る者は今や皇帝一人となった。
否，元より知る者は彼より他には居なかったのだ。
皇帝は誰が聞こうともそれについて口を開くことはなかった。
例えその王の子孫にも，伝えることはなかった。
「そうだとしても私は……どうしても知りたいんです！」
トワル城の一室でまだあどけなさの残る少年が叫んだ。
困ったような怒ったような複雑な面持ちのその母に懇願した。
「何も知らず，この血に翻弄されるのは嫌です……！」
少年が己が気迫の全てを懸け懇願するもその母は少しも表情を変えずにじっと我が子の眼を見ていた。
紫を微かに孕んだ漆黒の眼をただひたすらに，じっとじっと見ていた。
彼女の意識は今は居ない城の主の許に在った。子の声は遠く，仕事に追われあまり返ってくることが出来ない夫を思い起こさせる眼に吸い込まれていた。
少年は母の様子に溜め息を吐いた。
もう何度目か知れぬ遣り取りがまた意味を成すことなく終わった。
背後で引き留める声がしたが，戻ったところで不毛な遣り取りが繰り返されるだけということを彼は知っていた。

決して日が差さぬ窓は濡れて城の暗さを際立たせていた。
廊下を抜け，石造りの古すぎて苔を生し掛けた階段を下り向かうは修練場。近付くほどに湿った城内に乾いた金属音と勇ましい声はよく耳を刺激する。
少年は修練場が堪らなく好きであった。
足を踏み入れるとそこの主とも言える騎士長アルヴァ・ソーンが
「テンレイ様，帝王学の時間をお忘れでしたか？」
と，わざとらしく聞いてきた。
「今日だったのか？」
これまたテンレイもわざとらしく返した。すると，アルヴァは深く溜息を吐いてよろけて壁に背をもたれてしまった。
耳を澄ませば“全く，二代揃って何を――”と彼はぶつぶつ呟いていた。
「仕方がないだろう？関心がない物には時間を使いたくないんだ」
悪気なくテンレイは思っていることを言う。
それが苦労症の騎士団長をさらに悩ませてしまうということに彼は気付かない。子供故の残酷さと言うか，彼は比較的自分の思いに素直な方であった。
素直すぎるがゆえに不真面目だと咎められることもあるが，彼は決して不真面目でもない。関心があるものに対してはその真相を知るまでは諦めようとしない頑固さを持っていた。
近頃，その関心が不運にも決して明かされたことのない王の失踪の向いてしまった。
気になって仕方がなくて，普段は近寄りたくもない首都へ行きたくて仕方がなかった。
それをアルヴァに語ると“テイラー様の許可無しに行くのはお止めなさい！”とものすごい形相で叱られたばかりであった。
トワルの城主テイラーもまた陰なる過去を持つ者で，その陰はどうやら皇帝が最も関わっているらしく皇帝のことを一言でも語ろうとすれば一瞬で機嫌を損ねてしまうほどである。

そのことを踏まえての判断であったのだろうが，禁止されると行動したくなるものであった。
「困りますよ……。仮にも貴方は将来このトワルを担うのですよ？」
首をもたげたままアルヴァは至極呆れたような声でそう言った。
「どうせ，外交など無い。何もしなくても統治できるだろう」
テンレイは脳裏に街の様子を浮かべる。
一つの大通りを除けば疎らな住居と広大な果樹園が広がるばかり……統治するための最低限の法がある今，公爵の仕事など無いに等しい。それ故に長くトワル公爵が戻らずとも乱れることなく，静かに平和に単調に毎日が過ぎて行くだけの場所。
「公爵を襲位した人が居ればいいだろ？」
ニコッと笑うテンレイに対し，アルヴァはまたゆっくりと首を振った。
「全く……貴方と言う人は！　貴方が公爵となるとき――テイラー様が即位する時ですよ！　貴方は公爵という位だけでなく皇子という――」
「あーはいはい分かった。とりあえず説教はこれくらいにして手合わせしてくれ」
彼はアルヴァの長い長い説教の間にちゃっかりレイピアを騎士見習いより調達してきていた。
アルヴァの鼻先に突きつけて挑発すれば，騎士達がぞろぞろと集まってきた。
「本当に困った人ですね……」
そう言いつつもその顔には笑みが見受けられた。
テンレイから距離を取って恭しく一礼をする。そして無駄のなく酷く整った様相でレイピアを構えた。
「さぁ，どうぞ？　ただし，私が勝ったら帝王学を学んでいただきますからね」
礼儀正しさの中に燃え上がる静かなる炎。
「負けても学ばせるつもりだろう？」

対抗するがごとく燃え上がる黄なる炎。
「よくお分かりで」
「お前の過去の悪名なら父上から聞いているしな！」
そしてテンレイは脇目も振らず踏みこむ。体中に存在するあらゆる力を目の前に込め突く！
しかし，アルヴァはその突きをあっさりと受け流した。
「こんな考え無しの突きで私に勝てるとでも？　馬鹿にしないでいただいきたいところです」

2：「荊騎士アルヴァ」（途中）

アルヴァは涼しい顔のまま、ひたすら冷たくテンレイを一瞥した。
そして、嫌味な笑みを浮かべ、剣先をテンレイに向ける。
「貴方が手合わせを願ったのです。どうなろうと構いませんね？」
挨拶代わりにテンレイが剣先をアルヴァに向ければ、すぐさまアルヴァは攻撃態勢に入った。
特徴的な紫色の眼は決して獲物（テンレイ）を捉えて逃がさない。
しかし、テンレイは彼を恐れない。紫眼を捉え返し、負けじと向かってゆく。
「どうしてそんな力を持ちながら、首都へ仕えないんだ？」
アルヴァは何も返さない。
テンレイを冷たく見据えたまま、応戦するのみである。
無駄のない動き、時折溢れる殺気、覇気。
見る者全てが彼のことを相当な手練だと言い、恐怖を露わにするほど彼は強い。
美しくも鋭く、本気を出せば眼は彼を捉える事が出来ない。
素早さについてゆけず、その姿を幻影だと評する者も居る。
ダークブロンドの下から垣間見える紫色の眼に捉えられて勝てる者はそうそう居ない。
――例え手加減していたとしても、だ。
「貴方を傷つけては、テイラー様からお叱りを受けてしまいます。そろそろに諦めてくれませんか？」
アルヴァはそういうと鋭く薙ぎ払い、隙が出来た内にテンレイの手から強引に細剣（レイピア）を奪い取った。
「私とて、主君の怒りに触れると命の保証は在りませんからね」
相当な手練である彼が恐れる者はただ一つ。“主君の怒りに触れること”
彼は、主君テイラーの命には限りなく忠実であった。アルヴァは隠

されたテイラーの過去を知る数少ない人物の一人なのだろう。
霧雨に閉ざされたこのトワルに敢(あえ)て居続けるのは、その過去に縛られている故か。
「お前の“お叱り”を受ける姿も悪くない」
体力は確実に削られていたが、負けじと言い返した。
肉体が疲弊しても、若さゆえに精神は未だ健在であった。
黒いそれでいて紫光を孕んだその眼は爛々と輝き、アルヴァを食い入るように見据えている。
「私は、自分の身は自分で守りたい。学よりも、技を得たい」
ゆっくりとテンレイは紡ぎ出した。
「だから、私にどうしろと言うのです？　帝王学ではなく剣を教えろ、と？」
至極、不機嫌な声である。眉間に皺がより、ただでさえ鋭い眼がさらに険しくなっている。
自分の細剣(レイピア)を鞘に収め、テンレイの分を手に持った。
「私の指導はまだ貴方には適しません。テイラー様の指令が下るまで、私は帝王学しか教えることができないのです」
アルヴァは周囲に控えていた部下の一人にテンレイが持っていた剣を手渡し、“テンレイ様の相手をしろ”と命じた。青い上衣を着た黒髪碧眼、中肉中背の若い騎士である。階級は装飾からして中級騎士くらいであろうか。銀糸の刺繍が施された上衣、トワル公爵家の紋章、“霧纏いし白龍”が輝く左胸は確かに公爵に認められし、騎士の証である。
「」

「
・テンレイ・アルヴァ戦う。
・その最中にテイラー帰還。
・明日、祝宴のため首都へ向かうと言われるが、祝宴となると気落ち。

「ちょうどよかったじゃないですか。首都に行くついでに訪ねてみては」
「嫌だ。それは嫌だ。」
「どうして？」
「真面目に取り合ってもらえないから」
・テイラーはわけを聞くが、苦い顔をしたためテンレイは閉口。
・それにつけこんでアルヴァがテイラーに「殿下がどうしても帝王学を学ぼうとしません。テイラー様、言ってやってください」
・テイラーの命令には逆らえず渋々テンレイはアルヴァと部屋へ。
・くどくど授業。
・よたよたになって夕食。（睡魔の襲来）
・途中で寝てしまい、レイルザが「まぁ、行儀悪い！」と驚く。

「2」
・早朝に起こされた。
・身なりを整える。
・テイラーに許可をもらうが、レイルザは赦さずちまちまちまちま訂正するうちに出発の時間へ。
・テイラーはやり終えたい仕事があるため、後で行くという。
・レイルザと行けと言われたが、頑なに拒み、テンレイに甘いテイラーは自分と共に行くことを許す。
・空白の時間。ごーろごろ。
・城へ」

2：「虚空皇帝の祝宴」

テンレイは乗り気のしないまま父に連れられ足取り重く、妙に明るい城内を進んだ。
そして、ひしめく着飾った貴族たちの間を上手くすり抜け会場に辿り着いた。
「傲慢なあいつを思い浮かべるだけで何もかもが不味くなる」
と、父に言いたい気持ちをぐっと堪えることに必死で前方への注意が散漫であった。
扉番に今日の予定を尋ねていた父の背中に衝突した。
「ボーっとするんじゃない。お前が陛下を好ましく思ってないことくらい知っている。
何せ、この私の息子だからな。
しかし、陛下には子息がいないのだ。もし、陛下がお亡くなりになられたら我らが再び王を継がねばならない。そう考えるとまだ生きてもらってなければ困ると思わないか？」
サラっとした言動とは裏腹に、彼の眼は獣の様に鋭く光っていた。
その眼から逃れることは出来ない。
定められた重職から逃れられぬのと同様に、それは幼い少年を現実に拘束した。
少年はそれでも尚、上の空であった。
「行くぞ！　遅れてしまう！」という父の呼びかけが彼の聴覚を刺激するまでずっと。

本会場は重鎮のみしか入ることができない。
ブリステアでの重鎮は、伯爵以上の貴族および侯爵以上の爵位の継承権を持つ者である。
旅商、放浪の民、傭兵団から聞く話によるとこれは万国共通とのことである。

全てが重鎮という選ばれし者であった。
しかし、決して舞踏会や饗宴などを催さないトワル公爵家の者には、
見たことも無い顔ばかりが固い顔で席についているだけであった。
「この息苦しさには慣れそうにない」
テンレイは行き場のない緊張感と不快感から嫌々ながら着席した。
そして、最後にテイラーが着席するとそれを見計らったかのように祝宴はすぐに始まった。

人々は知人同士で個々に話し始める。
この頃購入した絵画の自慢や自分の召使がいかに有能か。
はたまた自分の妾の美しさにその人数など、内容はまさに俗の権化である。
見かけ倒しの気品を纏い、下賤な会話を平気でやってのける。
重鎮たちは、異例の皇帝の下、堕落していた。

テンレイは幼いその眼で冷たくそれらを一睨みし、卓上の葡萄酒に手をつけた。

「遅かったわね。てっきり欠席したのかと思ってましたよ？
まぁ良いです、来てくれただけいいですよ。ほんとうに」
隣から不機嫌そうな声が耳に届く。
それは、母レイルザからの久々に会った夫に対しての皮肉であった。
どうやらその口ぶりからしてテイラーが帰ってくることを知っていたらしい。
父を慕う息子に旦那の帰りを伝えないとはレイルザも意地が悪いものである。
「こいつが遅かったんだ。やっぱりどうしても嫌いらしくてな」
そう言う旦那に妻はただ冷笑を浴びせただけである。

よほど機嫌が悪い。
重鎮の婦人に「貴方など捨てて浮気でもしているんじゃないかしら？」と笑われでもしたのだろう。
彼女から確かな殺気を感じた。
「久しぶりに会えたから表向きだけでも優しくできないのか？　レイルザ……」
その笑みは恐怖を隠し切れていない。
テイラーは妻の殺気にはどうしても勝てない。
「嫌だわ……何てこと言うの？　長い間、私に会いに来て下さらなかったのが悪いのよ」
彼が妻に会ったのは半年ぶりである。
それほど彼の公爵以外の職「総司令官」という雑用係の仕事――その仕事内容はひたすらに隠されている――は忙しいものである。
帰ってきて数日後にまた仕事で出ていくということも珍しくない。
浮気を疑う気持ちも分からなくもないが、そんな余裕などテイラーにはなかった。
無論、余裕があったとしても彼にはその気はない。ただひたすらに彼は一途なのである。

蟠りを解こうと必死に弁解する父。
葡萄酒の瓶を空にしてもなお自慢話を続ける貴族達。
テンレイは一人、つまらなそうに溜め息を吐いた。
そんな時、突如ざわめきが止んだ。
何事かと思い、王座を見れば皇帝が座るところであった。
そして、彼は歓迎の言葉を口にした。
「我が国を担う重鎮の者たちよ！　良くぞ我が祝いの席に来てくれた。
今宵はよく飲み、よく食べ楽しんでくれ」
毎年変わることのない、形式的な挨拶だとテンレイは舌打ちした。
が、今年はその続きがあった。

「が、酒の精と踊る前に、この国の情勢を聞いて欲しい。
我が国ブリステアは闇帝レイド・ヴィルヘルム率いる、
敵国アクフレージョンと緊張状態にあるということは皆存じている
ことであろう」
　ここで皇帝は一息つき、反応を観察した。
人々が真剣な顔で聞き入ってることを慎重に確認し、再び話し始め
た。
「ここからが本題なのだ。今まで我が国は辛うじて彼の国と和解を
していた。
しかし昨日、彼の皇帝は制約を破り捨て、我が国の領土を荒らし、
乱した。
アールノイス平原は全焼。公爵家族の安否は不明。
そうだろう？　テイラー」
「はい、その通りです。陛下」
テイラーの声は生命を帯びていない。
しかし、あからさまに憎悪を出すことは決してしなかった。
ひたすらに彼は無表情である。
「焼き払われたのだ。罪なき者共は成す術もなく地に倒れることを
余儀なくされたのだ！
これは我々に対する宣戦布告と受け取り彼と戦うことを決めた」
　どよめきと感嘆。動揺する者は多い。
人々は戦争を知らないのだ。
　剣を握り馬を操り、人を殺める。
日々繰り返される、諸侯同士のせめぎ合いに本人らは出てこない。
彼らは傭兵たちを雇い、自らの手を決して血で汚すような真似はし
なかった。
　そんな時代だ。実戦経験のある貴族はそうそう居ない筈である。
言うまでもなくテンレイもその一人であった。
護身術としての剣術は習いしも、事実それが実戦で使えるものかど
うか彼は怪しんでいた。

「この剣術を活かせるときがついに来る……！　僕も行きたい！
まだ子供だけど……護られるだけじゃあの爺と同じなんだ！」
そう心で叫び、意を決して彼は動いた。
「今度は私も行かせてください。父上！」
　言われた方は堪ったものではない。
テイラーは突然のごとくただただ呆然とした。
「な、なんだと？！　お前は成人の儀を未だ済ませていないのだぞ！　それはさすがに駄目だ。
確かにお前にそんな思いがあるということはとても嬉しい。だが！」
「嫌だ！　父が駄目と言おうが私は行く！」
頑固なテンレイは一歩も引こうとしない。
彼の性格をよく知るレイルザは、
「そうね。あなたはテイラーの後を継がなければならない身ですもの。
テイラー許してあげなさい。私からもお願いするわ。
でも、成人の儀まで待ちなさい。貴方は13、あと2年待てばいいことよ」
そう言って息子の頭を優しく撫でる。
レイルザに言われたら言い返せないのはテンレイも同じであった。
「そうだ。成人の儀を過ぎたらお前を連れていくことを約束しよう。ただし――絶対に背を向けるな！　これだけは守れ」
　テンレイは静かに頷いた。澄んだ眼は静かな情熱を湛えている。
そんな彼をテイラーは無言でじっと見つめた。
依然意志に揺らぎがないかと確認するためだったが、テンレイの意志は固く揺らぎそうになかった。

「よし、じゃあ食べようか！　もたもたしてると無くなるぞ」
　ポンポンとテンレイの頭を軽く叩いて何事も無かったようにテイラーは笑った。
見つめ合い続けるのも簡単ではない。

「そうだね！」
“笑顔は引き攣っていなかっただろうか”
テンレイは無意味な不安に疑問を持ちながらも両親についていった。

会場は再び騒然としていた。
もう酒の精に踊らされ潰されてしまってるだらしない輩も数多くいた。
もう騒げるのも最後と思っている悲観者もいた。
大変珍しい、戦い好きの老練の者は上機嫌に酔っている。
テンレイは騒々しさに深く溜息を吐いて、ひたすら親の背を追った。

3：「疾走公子現る」

背を追ううちに見慣れた影を見つける。
その影の方もこちらに気づいたらしくこっちに向かって走ってきた。
「テンレイじゃん！　めっずらしーこともあるもんだ」
彼の名はロウ・ネドル。
クトックナー公爵の嫡男であり、テンレイの従弟であり親友である。
「あのな、陛下直々の祝宴をすっぽかせると思っているのか？」
「あーそうか……。それもそうだな！」
彼の浅はかさは少々気になるところがあるのだが、テンレイは彼のそういう部分がむしろ好きであった。
自分が堅いためかそんな彼が羨ましくもあった。
「ほぉロウか。ということは私の愚弟も居るということか？」
テンレイがついて来ていないことに気付き両親は引き返して来たらしい。
「よーっす！　テイラー伯父さん！」
と、無邪気に挨拶するその姿はまるで下町の少年以外何物でもない。
服装こそは隙はないが、態度や口ぶりは本当に貴族らしくない。
「相変わらず元気そうで何よりだ」
テイラーはそんな彼の振る舞いをさほど気にしていない。
むしろテンレイと同様に気にいってるのかもしれない。
顔は芯から笑っている様であった。
「あーそういや親父だったな。親父なら向こうで淑女を口説いてた、なぁ……。」
ロウの笑顔が一気に引き攣る。
「また浮気か、全くだな！　やつにはフミリィという美女が居るだろうに……貪欲な奴め。」
テイラーは愉しむようにわざと声を張り上げた。
「お、伯父さん！　お袋には黙って――」

うろたえるロウの背後に細身長身の貴婦人が現れた。
「あら、私に何か用？」
ロウが「終わった……」と凍りついたのは言うまでもない。
フミリィその人がレイルザを連れ登場した。
「い、いや今日も空が青いでつねー母上ーっと」
「誤魔化さなくていいわ、ロウ。もうすでに絞ってきましたからね」
「さ、さいですか……」
「いーわね、ロウ。貴方はあんな風になっちゃ駄目ですよ？　息子までこってり絞りたくはないんですから」
「は、はは。もちろんですよー」
ロウは滝のごとく冷や汗を流していた。何故ならすでに彼は２０股もかけていた。
テンレイより２歳下の少年の分際で街の女の子を口説いていた。
「本当に叔父様は父上の弟なのですか？」
「あぁ。当たり前だ」
「浮気が何をなすのか、よく分からないのですが」
「あぁ、私もよく分からんな。レイルザに歯向かう気はさらさら起きんでな」
殺気を纏うレイルザを前に浮気できる者など居るだろうか。
いや、このブリステア中を探しても彼女に歯向かえる男は居ない筈である。
「恐妻だけは嫌だな」と心からテンレイは思う。
だが、自分も恐妻家になりそうな気がしてならなかった。

「あー怖かった！」
母からようやく解放されたロウはどこかやつれていた。
「お疲れ様」
テンレイもテンレイで別の意味でやつれていた。
「なんか冷てーな！　テンレイ」
「人に酔ったんだ」

鼻に付く酒の臭いに奥方達の香の臭い。嫌でもそれらは頭痛と吐き気をもたらした。
「ん？　そんなにここ人通ってないのに、か？」
人通り慣れをしているロウは何ともない様子で、テンレイの心情は分からなかった。
「あと、自分の未来が見えて落胆してる最中だからだな」
気分の落ち込みも不調を助長させている。頭が重いのがさらに重くなる。
「だ、大丈夫か！　どんな未来見たんだよ！」
ロウの大声に顔を顰める。
彼の声は悪い意味で良く頭に響いた。
「少し、声を、小さく、してくれ」
言い聞かせるようにゆっくり言うと彼は慌てて謝った。
しかし、その声もまた大きく頭に響いた。
最終的にロウは、
「ま、未来のことなんて変わるもんだからよ、気にするな！」
満面の笑みで言う。
あまりに純粋なものだから、彼が気にするなというと妙に説得力があった。

「あ、そうだ！　明日、俺んとこ来いよ！　せっかく会ったんだから遊ばなきゃ勿体無いぜ」
「あ、明日？」
ロウは唐突に話題を変える。
時折ついていけないが、この手の遊びの誘いは定番でまたかと決まって心で呟くのだった。
「そう！　いつもの場所に。予定、ある？」
「いや、ない」
「じゃ、明日な！　ちゃーんと来いよ！」
鼻先が付かんばかりに顔を近づけてくる。

ものすごく疑わしい目をしていたので、テンレイはむっとして言い返した。
「私がすっぽかしたことがあったか？」
サボりもなければ遅刻もない。必ずロウより先に待ち合わせ場所に着くように急いだ。
それなのに疑われたらたまったもんではない。
「あっはっは！　悪い悪い！　嘘だ」
「もう二度と言わないことだな。次言ったら２０股バラす」
「ひぃ！　それだけは……！」
「分かったならそれでよし」

祝宴はネドル一家と談話してるうちに終わりを告げた。
酔いつぶれが城内の客間に運ばれてゆくのを横目に人々はそれぞれの居場所に戻って行くのだった。

4：「商人の街クトックナー」

翌日、アルヴァの眼をくらますことに成功したテンレイは真っ先にある部屋へ足を進めた。

城内は青い絨毯でどの廊下覆われているのだが、新調しないためかどことなくカビ臭さをばらまく権化となっていた。城内の者の一部はこの絨毯のせいか、乾燥した日はくしゃみに悩まされていた。テイラーに頼んだ者も居たそうだが、テイラーは頑なにそれを断ったそうだ。

目指している部屋は謁見の間の隣の小部屋。

そこにはブリステアの各重要な拠点に繋がる魔法陣がある。

それは何代も前の皇帝が皇族の者を命じてブリステア国内の重要な拠点へ派遣し、刻ませた内の一つである。誰もがその魔法を唱えられるわけでなく、時空間の魔法というのはこのブリステア王家の特権である。

しかし、その魔法も次第に弱体化しつつある。

強大な魔力を誇った始祖の血は今や薄まり、次第に時間と労力だけが嵩むようになってきた。

それ故に、テンレイはこの先祖が遺した空間転移魔法を頼るのだ。

「我、大いなる始祖神ルシフェルの子孫なり。我が血を探りその力を明け渡せ」

始祖神の血がなければ、時空間魔法は使えない。

これを利用して国家は、真に忠誠を誓う者とそうでない者を分ける方法を得た。

皇帝の血を結晶化させて生成されし真っ赤な柘榴石のリングを貴族の全てに与えた。

誓いを破れば石は血に戻り、決して消えぬ永遠の染みとして逆賊らを掲示するのだ。

果たして、魔法陣は彼を呑みこんだ。
視界は湾曲し、三半規管は見えざる力に侵される。
空間に存在する色という色の全てが混じり合う時、幼き身体は負荷に耐えきれず意識を手放していた。

遠い場所から何か中身の詰まった物が落下する音が聞こえた。
意識がまだはっきりせず、彼は暗い小部屋で一人上の空であった。
つまり、中身の詰まった物というのは勿論テンレイのことである。
眼が順応するのを待ってからようやく彼は立ち上がる。
床を見遣ればトワル城ではないことが一目瞭然である。
トワル城を象徴すると言ってもいい青色の古びた絨毯ではなく、代わりに深緑色の小奇麗な絨毯が床を覆っていた。

――公爵領クトックナー。
代々、ブリステア皇帝の最も近しき分家が所有してきた地で、首都に次いで栄える街と言ってもいい。
国外からの商人は必ずクトックナーに立ち寄り、商売をする。
何故ならば、首都は警戒態勢が強固で国外の者を断固として拒絶する。
そこで、商人たちは皇族の一門が納めるクトックナーに目を付けた。
品物の一部は公爵に申し出れば首都へ売り出すことも可能であったし、多くの商人が集まることで情報を入手するのも容易であるからだ。
クトックナー城は首都への出荷を請う商人達が多く出入りしているため、城外に出るのは容易であった。
街中に見張りの兵はそれほど居ない。
というのも、役職をわざわざ作らずとも至る所に城に仕える騎士が一般人にまぎれて闊歩しているからなのだが。
大まかに見れば、クトックナーという街は緩く、無法地帯に見える。

しかし街は活気に満ち、無法地帯独特の陰気臭さは無く誰もが恩恵を確実に享受しているのだ。
歩きながらテンレイは密かにトワルと比べ、その華やかさを羨望した。
公爵領とは名ばかりで霧雨のせいか陰鬱な印象を受ける田園地帯のトワルとは真逆であった。
人懐こい街の人々は、詮索好きで彼らの眼を騙すことは不可能に近い。
トワルでは通用する変装はここでは全く以て意味を成さなかった。
「あら、トワルの！　元気にしてるかーい？」
そんな調子で元気よく挨拶されるものだから本人としては困ったものである。
「えぇ、勿論」
笑顔を浮かべて返すものの、冷や汗を密かに流す。
稀に叔父のクトックナー公爵その人が居るため出来るだけ身を潜めておきたいのだ。
レイルザの耳に入ればみっちりと彼女から直々に帝王学を教わる羽目になる。
言うなればそれはスパルタを超えて地獄。逃げることを考えた暁には未来の自由は保障できない。
標準魔法を皆伝しているレイルザは、部屋全体に結界を張ってテンレイを閉じ込めることなど朝飯前であった。
そんなリスクを冒して今日も訪れたが、おそらく昨日だけでフミリィの怒りが治まったとは言えない。
妻に言葉で拘束された公爵は居城から出られない筈なのでいつもよりは安全ではある。
待ち合わせ時間から３０分が過ぎた。
しかし、ロウは未だ現れない。
（……捕まったのだろうか？）
不安と僅かな怒りを覚えながらも人々の視線を上手く避けつつ待

ち続けた。

「やーっと抜け出せた――！テンレイ怒って……るだろうなぁ」
ロウは、心底困った表情を浮かべて大げさに溜息をついた。
これは演技ではないのだが、他人から見ればふざけているようにしか見えない。通りすがる人はクスリと笑った。
そんな彼が抜け出すことができなかった原因は今朝に遡る。
何も考えずに衣服を召使に渡したところ、その衣服の間に何枚もの手紙の束が挟まっていたらしくそっくりそのままフミリィの手元へ渡っていった。
当然のごとく所業はばれ、父同様にこってり絞られていたのである。
「召使に告げ口されるとは思わなんだ……」
ただただ悲しいばかり。
まだ彼が失望などという複雑な感情を知らなかったのがその召使にとって幸運であった。
おそらくそのまま単純なロウはその召使を召し続けると思われる。

「あ、テンレイ！　なんかすっげー怖い。」
考えごとに更けるテンレイの纏うオーラは重々しい。
ロウにはどうしても彼が怒ってるようにしか見えなかった。
実際はテンレイはさほど怒っておらず、むしろロウを案じていた。
「よ、よう……テンレイ」
背後から弱々しい声を掛ける。
「やっと来たか、ロウ」
返ってきた声は落ち着き払っていた。
これでは本当に怒ってるようにしか見えない。
「は、反省してるから！　言い訳もしねーから！」
必死になって頭を下げ続けるロウ。
折角の洒落た髪型も無残になってしまっている。
「……は？」

対してテンレイはどうしてこんなに彼が謝るのかが理解できていない。
「ほ、ほら俺、一時間も遅れたし！」
大した反応がないテンレイにさらに焦りを覚える、ロウ。
「あぁ、そのことかいつもの事だから別に気にしていない」
テンレイの声は飾り気がなく、焦る者には届きにくい。
「ゆ、許さないよな！　ってあれ、テンレイ？」
「何一人で慌ててるんだ？　変なやつだな」
そういうと、テンレイは徐に笑い始めてしまった。
ロウは状況把握できず、間抜けに口を開け唖然としている。
「なーにしてんだ？　さっさと行くぞ」
笑いをどうにか堪えて、テンレイは呼びかけた。
すると、ロウは「お、おうよ！」と言い、連れられるままについてきた。

目的地は”ｈｏｐｅ　ｒａｉｎ～希望の雨～”という場所。
昼はカフェテラスで子供でも入れるが、日が沈めば酒場となるため無理やり追い出される。
城から一番離れたところにあり、わざわざ足を運ぶような者は滅多に居らず、城の者もここには来ない。
――ただ一人を除いては。
そこを見つけたのはちょうど半年前。
その日も二人は今日の様に城を抜け出し、することも無く街中を散策しているうちに偶然見つけたのだ。

主人はサラ・アイヴィス。
公爵に仕える騎士長レドール・アイヴィスの妻である。
彼は自分の身の上を話そうとはしなかったので、これはサラから告げられた。
この二人の馴れ初め話は「Ｈｏｐｅ　Ｒａｉｎ」の常連ならば誰

でも知っているほど有名なほどである。
まだレドールが騎士見習いの時、レドールと彼の親友とがサラを取り合い、結局二人は縁を切りもう一人の方は姿を暗ましてしまったというのだ。
レドールはさほど高い身分ではなく、軍配は貴族の息子であったという親友の方にあがると思われたが、サラはレドールを選んだ。貧しいながらも尽くす姿が好みだったそうだ。
サラ自体はというと、当時は大商人の令嬢であったのだが両親に反発し駆け落ち同然で家を出てそれっきり。その時、移り住んだ家がこのｈｏｐｅ　ｒａｉｎなのである。

今日もサラは休む間もなく働いている。今はちょうどアフタヌーンティーの時刻。
仕事の合間に一息吐きたいという門番が屯って居り、店内は満席でとても騒がしい。
店内に入り、隈なく見回すと辛うじて席が開いていた。急ぎ、席を確保し早速飲み物を頼んだ。
テンレイは紅茶を頼み、ロウはキウイジュースを頼む。
常連客に層があるのは「Ｈｏｐｅ　Ｒａｉｎ」ぐらいなモノで、大抵は中年男性の罵声が飛び交うような店ばかり。
商人の街と言えど、婦人等に行く宛てもなく、家に籠っていたが「Ｈｏｐｅ　Ｒａｉｎ」ができてからというものの街の婦人たちもより明るくなったようである。
それほどこの店は斬新であった。
今までは女主人が居る店と言えば、如何わしい夜の店ぐらいしかなく、婦人には縁がなかったのだ。

少し経って飲み物が運ばれる。まだ冷たい。
一口飲み、昨日の祝宴のこと、アクフレージョンとの関係のことを話題に出した。

「え、マジ？　本気ですか！　本当に陛下が言ったのか！？　あのアクフレージョンと？」
“昨日の祝宴に居たというのに”とテンレイは呆れた。
やはり彼は、皇帝の話を聞いていなかったらしい。彼らしいと言えば彼らしいのだが。
「そうだ。アールノイス平原を焼き払われ、表向きの平和協定は破られた。仮初めの平和は終わりというわけだ。」
「へぇ……」
気難しそうな表情を浮かべる。
真面目な顔をすれば、幼さは残るが整った顔をしている。
彼はくしゃっと笑うため普段は台無しなのである。
「ホントに理解しているか？」
念のために聞く。彼の場合、虚勢を張っていることが多いのだ。
「俺はそこまで馬鹿じゃない！」
バンと机を叩く。
グラリとグラスは危うげに揺れたが、全ては零れなかった。
「それは安心した」
テンレイは笑っていた。
それも、どこか見下すような表情であった。
「で、その平原に行くんだろ？　お前」
苛立ち混じりの声でロウは返した。
「あぁ、いつかは本当に戦争が始まる。だが……」
「だが……何だよ？」
「成人の儀を終えるまで、私は同行を許されなかった。だから、あと3年は頼りない剣の稽古を続けなきゃならない」
前にも言ったように今の剣技は礼儀作法並みの役に立たないものなので、もちろん満足していない。
自分の身は自分で守る。守られるというのは、彼は嫌だったのだ。
守られる者の典型として思い浮かぶのが貴族。一緒にされるのは御免だった。

「流石、皇帝の成り損ないだな！」
テンレイは苦笑いを浮かべる。
成り損ないという表現には少々頭に来た。
しかし、思ったのだ。
“高位の中の高位である皇帝を否定されるのはむしろ喜ぶべきことではないか”と。
「このクトックナーはクトックナーでお前が独裁するんだよな」
しかし、言い返さずに引きさがる様な真似はしない。
負けず劣らずテンレイも言い返した。
「独裁？　そんなことしねぇよ！　テンレイ！　お前こそ王位から逃げ出すんじゃないのか！？」
ロウの怒りは頂点に達したようである。
顔を真っ赤にし、唇はわなわなと震えている。
「まぁ……そんなに怒るなって。冗談だ」
別段怒ってないテンレイは怒るロウを微笑みながら諭した。
「キウイジュースには酔いしれてしまうんだよなー！　うん、こいつが悪いんだ」
単純なロウはあまりにも簡単に機嫌を直した。
彼の機嫌を直すコツはひたすら褒めること。
とくに服装について褒めると、大抵機嫌を直すのであった。
笑いながら言うロウにテンレイは一言。
「キウイジュースのせいにするなよ」
全くごもっともである。キウイジュースには何の罪もないのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5595n/

２「影纏いし白刃」

2011年10月7日18時26分発行